

社会運動としての自力建設経験とその専門化・職業化

富永京子 ※1

社会運動においてはある種のアマチュアリズムが尊ばれ、建設に関してもそうした規範は共通している。例えば、オキュパイやスクウォッティングといった空間占拠活動では、自力建設による住居や小規模商業施設が数多くある。さらに、こうした社会運動への関与経験を経て、専門化した建築技術をもって稼得活動を行う人々が世界中で見られる。建築プロセスにおける専門性の不在が重要視される自力建設の経験を経て、専門化と稼得活動に至ることは、一見すると矛盾があるようにも思われる。そこで本研究は、社会運動の経験者がなぜ、その経験をきっかけに自身の技術を専門化させ、さらに稼得活動として職業化させるに至ったのか、また、そうした稼得活動には、どのような形で社会運動としての理念が内在するのかという問いを明らかにする。

研究背景と目的

本研究の目的は、自力建設を伴う社会運動を経験した人々が、その後建築技術を研鑽し、職業化・専門化させる経緯とそのプロセスに内在する社会運動としての意義を明らかにする。

2000年代以降、世界中で、自力建設を伴う社会運動が数多く見られた。特定の空間を長期間占拠するオキュパイ・ムーブメントや、G7サミットやWHO閣僚会議に抗議するサミット・プロテストでは、世界中から参加者がやってくるため、自力建設によるキャンプや宿舎が設営される(Feigenbaum, Frenzel and McCurdy 2013, Heinonen 2019など)。この過程自体が、空間を自らの手で作ることによって、自らの理想となる世界を自律的に作る試みと言える。

また、一時的な建築でなくとも、自立建設の試みはさまざまな社会運動において見られ、例えばソーシャル・センターと呼ばれる、移民や若者、貧困な状態にある者を

救済するために医療や食事を提供する場を構築する運動でも、コミュニティがアマチュア建築家たちの自力建設によって作られることはよくある(Creasap 2021, Hara and Andreas 2021)。

こうした社会運動における自力建設は、第一にその時限性・局所性のために壊れやすい(Collapsible)ことが重要視されている。低廉で再利用可能な廃材から建設することで再利用と環境への配慮を実現するのもこの一環と考えられる。第二に、敢えて簡素な設計とし、熟練度や専門性によらず誰もが工程に携わることができるようにすることで、構成員の水平な関係形成、平等な社会運動参加を実現しようとする(Heinonen 2019)。

しかし、近年、社会運動で自力建設を経験した者が、その後プロフェッショナルの職人のもとでスキルを磨くことにより、リフォームやオーダーメイド家具製作といった作業を請け負うことで、自らの社会運動経験を、専門的職業として発展させる事例

※1 立命館大学 准教授

が数多く見られる。いわば社会運動における建築への関与が稼得活動・職業活動へとつながる事例と言えるだろう。

建築プロセスにおける専門性の不在が重要視される自力建設の経験を経て、専門化・職業化された活動への従事に至ることは、一見すると矛盾があると言える。

ここで本研究は、社会運動における自力建設の経験者がなぜ、その経験をきっかけに自身の技術を専門化・職業化させ、稼得活動を行うに至ったのか、また、自力建設をきっかけとする稼得活動には、社会運動としての理念が内在するののかという問いを明らかにする。それにより、建築のもつ社会運動・政治活動としての新たな一面を明らかにしたい。

研究成果と考察

欧州の社会運動において、自立建設や自立建築が採用されるようになった背景としては、特に大都市における都市計画、住宅政策の問題が大きかったとされる。1970年代以降、とりわけ住居へのアクセスが困難な人々が「スクウォッティング」と呼ばれる形で、空き家を合法的に再利用しつつ、行政や地域住民と連携する形でコミュニティ・センター、ソーシャルセンターやオルタナティブハウジングを運営するといった市民の活動がよく見られるようになった（Owens 2009, Jaureguiberry-Mondion, J. 2021 など）。つまり、ジェントリフィケーションや公共空間の私有化に対して、レパトリーとしてのスクウォットは、①象徴的な側面として、企業、資本主義的な価値観の拒否と②実践的な側面として、消費者や住民に手頃な代替案を提供する両方を持っているとされてきた（Creasap 2012, Hara and Andreas 2021, Yates 2015, Brown 2007, Vasudevan 2015 など）。

これに対して、日本の状況として、まず

制度的背景としてそもそもスクウォットができないという実態がある。そのため、建物に関しては基本的に、買うか、あるいは借りるかのどちらかとなりうる。日本においては、安価で老朽化した空き家ないし空き物件を購入する、あるいは賃貸ではあるが持ち主の許可を得るなどして、建物に対して自らの手でリフォームを行うといった形が取られやすい。また、その経験をきっかけに自身の技術を専門化・職業化させる者も少なくない。

技術の専門化・職業化と社会運動としての自力建設は相反するもののように考えられるが、従事者たちは、以下のような形で建築に関わる稼得活動と社会運動を両立させている。

① 「一人親方」「自営業者」が集まる共同経営・共同労働による稼得活動

多くの組織では、建築に関わる「一人親方」と呼ばれる自営業者が何人かいて、誰かが請け負った仕事を他の人に分配するスタイルを取っており、社会運動から派生した労働形態である、共同出資・共同経営・共同労働を主軸とするワーカーズコープ（労働者協同組合）のようなスタイルでの活動を行っている。契約に依存しない雇用関係を結んでいるところが多く、信頼関係や水平的な関係によって成立するコミュニティが数多くある。

② 実践的側面と象徴的側面の関係

先行研究の枠組みでは、スクウォットのような自治的に空間を形成する活動は「象徴的側面」と「実践的側面」があると言われているが、日本の自力建設従事者における稼得活動／社会運動は「実践的側面」が第一にあり、同世代で不安定な就労状況にある若年層や、学生、また住宅が借りられない民族的・性的マイノリティといった

人々に対して、リフォーム済みの住居を安価で提供するという点で、社会運動経験を持つ人々は自立建設の職業化において社会的理念と稼得活動を両立させるものである。

その結果として「象徴的側面」が強調される。第一に、時期や場合によっては高額になる可能性もある既存の賃貸不動産仲介サービスや引越し業者の見積もりに対して、社会運動経験を経た稼得活動を行う人々は可能な限り安価で、しかし労働の対価を得られるような見積もりを行うといった点で、なるべく平等な消費者と労働者の関係を形成しようとしている。このような議論は、労働運動や消費者運動とも繋がる。

これと関連して、多くの社会運動／稼得活動従事者は、雇用―労働の関係とともに、労働者―消費者の関係を曖昧化するようなシステムを構築している。たとえば、リノベーションや庭の整備といったサービスを購入した人々に対しても、例えば荷物を動かす、車を運転する、といった相対的に専門性の低い労働に参加させることで、労働のプロセスを消費者とも共有しようとする試みを行う人々もいる。多くの人が労働の過程に携わることでコミュニティ意識を高めるという理念は、スクウォッシングを軸とした運動にも見られるものである。

第二に、コミュニティ形成という点で、自力建設を通じた稼得活動には社会運動としての理念が見られる。こうした稼得活動／社会運動の多くは、地域住民との関係性を極めて重要視しており、顧客との顔の見える関係性を大事にしている。こういった理念も、オルター・グローバリゼーション運動などが重視してきた、ローカルを軸とした関係性とセーフティーネットの構築とも関連する。

第三に、多様性と包摂である。

どのコミュニティにおいても重視された

のは、例えば健康への不安や障害を持っていたり、さまざまな面でマイノリティと呼ばれる人々であったりと、日本社会における「普通の」働き方、生活の仕方に馴染まない人々を包摂するという点であった。困窮しやすく、住居や労働の場に困る彼らに仕事と住まいを提供するという意義は、多様性や包摂といった課題を考える上で大きな象徴的意義を持つ。

③「稼得活動」へのこだわり

先行研究では、上述したような活動は行政との連携やコミュニティ外部からの寄付のもと「社会運動」として行われている場合が多い。しかし、日本における多くのコミュニティは、継続的に稼得活動が可能な点を重視する。この背景には、制度的な補助が永続的に行われるとは限らず、また日本は外部からの寄付も少ないため、継続性を重視すると稼得活動化することがもっとも社会に適合的であるからだと考えられる。

まとめ

本研究の問いは、自力建設を伴う社会運動を経験した人々が、その後建築技術を研鑽し、職業化・専門化させる経緯と、そこに社会運動としての理念が見られるとしたらどのようなものなのか、ということであった。

建築技術をさらに専門化させる経緯については多くの経路があるため明確な議論は難しいが、いずれの自力建設コミュニティに属する人々も、自らの稼得活動と社会運動を両立させるような工夫を行っていた。

今回明らかにした稼得活動／社会運動には、「労働」の可塑性をもって社会運動的な理念を付与している過程が多々見られた。このような知見を踏まえて、今後の研究の展開として、労働研究とのさらなる接合を

考えていきたい。

参考文献

- Brown. 2007 “Mutinous eruptions: autonomous spaces of radical queer activism,” *Environment and Planning A*, Vol. 39: pp. 2685-2698.
- Creasap, Kimberly, 2021, “Building future politics’: projectivity and prefigurative politics in a Swedish social center”, *Social Movement Studies* 20(5): 567-183.
- Hara Kouki, Andreas Chatzidakis, 2021, “Implicit feminist solidarity(ies)? The role of gender in the social movements of the Greek crisis”, *Gender, Work & Organization* 28(3)
- Heinonen, Pijatta. 2019. “Constructing Autonomy: The Significance of Architecture in Creating and Manifesting Autonomy in Protest Camps.” *Social Movement Studies*, 18(6): 647–666.
- Jaureguiberry-Mondion, J. 2021, “Spatialising the collective: the spatial practices of two housing projects in Berlin,” *Social Cultural Geography*.
- Owens, L., 2009, *Cracking under Pressure, Polity*
- Yates, Luke, 2015, “Rethinking Prefiguration: Alternatives, Micropolitics and Goals in Social Movements.” *Social Movement*

Studies 14(1): 1-21.

- Vasudevan, A. 2015, “The autonomous city: Towards a critical geography of occupation,” *Progress in Human Geography*, Vol. 39(3): pp. 316-337.

謝辞

本研究は、窓研究所、大林財団、全労済協会、トヨタ財団、労働問題リサーチセンターの支援によるものである。